

# MURAMATSU通信 SPECIAL

保存版

総銀製ムラマツ・フルート  
DS<sub>model</sub> / SR<sub>model</sub>  
2つの個性を知る

遺伝子が、萌えている。

花の時期が過ぎ、木もれ日が心地よい季節。

咲いた花を愛でた人々も、

木もれ日をつくる葉を見上げることは少ないようです。

でも、その葉のなかに息づいている遺伝子が、

来年また花を咲かせるんですよ。

そう思うと、ほら、若葉色の中に、花の薄紅色が見えませんか？

ムラマツ・フルートのすべてにも、

日本で初めてフルートを完成させた情熱と愛情と技という

遺伝子が、すみずみまで受け継がれています。

——フルートが素敵なものになるために。

01 笛吹きとの対話  
人生と音楽の教師 マルセル・モイーズ  
●青木 宏

03 フルートの金属学  
五感で感じる「銀」の話  
●押田良機

05 **特集** 総銀製ムラマツ・フルート  
DSモデル / SRモデル

11 音楽史の扉  
C.P.E.バッハ  
●白尾 隆

13 ムラマツ・フルート ラインナップ

14 ムラマツ・フルート プライスリスト

# 人生と音楽の教師 マルセル・モイーズ

村松フルート製作所◎青木 宏



マルセル・モイーズ (Marcel Moyse)

(1889年5月17日、サンタムール～1984年11月1日、ブラットルボロ [アメリカ])  
フランス近代の最も優れたフルート奏者の一人。パリ音楽院でタファネルとゴーパールに学んだ後、パリ音楽院管弦楽団ほか幾つものオーケストラで首席奏者を歴任。1932年からはゴーパールの後を継いでパリ音楽院の教授となつて数多くの弟子を育て、現代のフルート奏法に多大な影響を与えた。

## モイーズとの出会い

1973年、もう40年も前のこととなりますが、マルセル・モイーズが初めて日本にやってきたのです。そして、東京の日経ホールで公開レッスンを開きました。私はそれに参加したのです。曲はT・ペーラム作曲の「ネル・コール・ピウ・ノン・ミ・セント(うつろな心)」の変奏曲。

私は中学生のころからフルートを吹くのが大好きでしたが、笛が好きになって一番初めに聴いた演奏会が、1961年に来日したパリ・ギャルド・レピュブリケーヌ吹奏楽団だったのは、幸運なことでした。首席フルート奏者はアンリ・ルボンとあって、パリ・コンセルヴァトワールでフィリップ・ゴーパールに学び、モイ

ーズにも師事した人です。これがメッポウうまくて、ドビュッシの「牧神の午後への前奏曲」は、素晴らしいものでした。これが私とフレンチ・スクールとの出会いでもあったのです。

私はモイーズの公開レッスンに出る前に、吉田雅夫先生から6年ほどフルートの手ほどきを受けていました。フルートの演奏や歴史だけでなく、音楽全体のことや、先生が尊敬し敬愛されていたモイーズについてなど、たたきこむように教えられました。

そこで、モイーズが来日すると聞いて、これは自分の音楽をみてもらう減多になり機会だと思つたのです。彼が体現しているフルートの伝統、フレンチ・スクールに、ぜひとも触れておきたかった。ヨ

これは私自身も、狭い経験ながら深く感じてきたことです。

当時モイーズはスイスのボスヴィルで、毎夏に3週間公開レッスンをされていたので、翌1974年8月から、そこに参加しました。当時のレッスンはテープにたくさん録ってあります。このレッスンは、私がフルートをつくるときの目標となる楽器のイメージ、そして音楽のイメージをつくるのに、かけがえのない基礎となりました。こうした経験がなかったら、フルートをつくっていくことができなかったと思います。

## モイーズの楽器をつくる

その後、モイーズからは、1年間自宅に来て暮らさないかとお誘いを受けたり(残念ながらこれはできませんでしたが)、また私の結婚式で牧師役をしてくださったりと、いろいろと親身になってくださっていました。

さて、1980年の暮れにモイーズから手紙が来ました。自分の楽器が古くなって鳴らなくなったので、新しい楽器がほしいというのです。もう90歳を超えていましたので、これから新しい楽器に慣れるのはたいへんなことだと思い、彼の楽器のコピーをつくって吹いていただく、ということになりました。そこで、楽器を送ってもらい、細部までそっくりにつくったのです。モイーズの楽器は、戦前



上/モイーズが使用していたケノンのオリジナル楽器  
下/ムラマツが製作したコピー楽器

にドイツでつくられた「トリラー・クラッペン・フレテ」という、トリル・キーがたくさんついているモデルで、洋銀製のカバード・キーでした。驚いたことに、この笛は誰が吹いても、あの「モイーズの音」がしたのです。楽器というものは、吹き手に共鳴していつて、吹き手に鳴りやすい楽器に変わっていくのです。何十年と使い込まれたこの笛は、モイーズによって育てられた楽器なのでした。

コピーする楽器の材質を何にするか、電話で尋ねたところ、モイーズはしばらく考えてから、洋銀に銀メッキという答えが返ってきました。5月17日が彼の誕生日。それに間に合うよう、丸3か月かけてつくりました。キーなどは原型をとどめないくらいに磨り減っているので、

それを復元したり、寸法はもろろんのこと、楽器の重さのバランスや、管の厚さ、トーンホールの位置関係、キーの形状などを、すべてまったく同じに仕上げたのです。頭部管だけは、モイーズが手を加えず、ぎて調子がくずれていたのをコピーせず、モイーズの奏法や音から推量して、こちらで新しくつくりました。この楽器の復元作業はとてもおもしろく、たいへん勉強になったものです。

モイーズはこの笛をとてにも気に入って、電話の向こうでも、半狂乱ともいえるような、たいへんな喜びようでした。この笛をニューヨークの小さな演奏会で吹いた記事が、「ニューヨークタイムズ」紙に載つたそうです。息子のルイの奥さんだったブランシュ・オネゲルさん(アルテュール・オネゲルの娘)にお会いしたときも、ぜひぶん感謝されました。

## 消えてしまった教則本

ところで、この楽器の値段ですが、計算してみるとたいへん高価で、24Kよりも高くなっています。モイーズという人は、お金を貯めるような生活を送ってきた人ではありません。江戸っ子ですから(笑)。当時、村松楽器の西新宿の店には、400人ほどの生徒さんがレッスンを受けていました。そこで、代金をいただくよりも、こうしたアマチュアのフルート奏者のための基礎的な教則本の決

## 楽器と音楽の根本を教わったレッスン

公開レッスンの当日、私はモイーズから演奏をほめられ、天にも昇る心地でした。このレッスンで教わったことは、今でも1から10まで全部覚えていきます。モイーズが持っている音楽に対する直観力は、まったく別格のものでした。吉田先生は、これを「フィーリング・インタープリテーション」、「感覚による解釈」と呼んでいました。モイーズ独特の言い回しや表現、そこにはいろいろな知恵がいつぱいつまっています。数多くの名演奏家たちと音楽をともにしてきた、その積み重ねが体の中にしみ込んでいるのです。そうした体験は、フルートだけでなく、音楽そのものを高めることができるのです。



1973年の来日時、吉田雅夫氏と共に。

定版を書いていただこうと、執筆をお願いしたところ、快く引き受けてくださったのです。

私たちはその出来上がりを心待ちにしていました。来日したブランシュさんという方が、一生懸命に書いていますよ、ということ、期待を膨らませていたのです。しかし、3年後の1984年11月、モイーズは惜しくもこの世を去りました。書きかけのエチュードは、モイーズの寝室に譜面があつたのですが、亡くなったときには行方がわからなくなつていたので、それきり、いまだに出てこないのです。出版されていたら、どんなに素敵なエチュードになったかと、これだけは心残りでなりません。

モイーズから私を受けとつたものは計りしれません。私のフルートと音楽と、そして人生の教師でもありました。

## 「ソノリテ課」

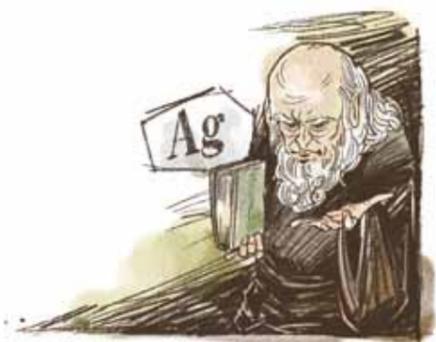
今、私たちは工場に新しいスペースを設けています。

私たちが心の中で温めてきたこの部門は、未来のムラマツがフルーティストと共に歩んでいくために、どうしても必要な場所だと思っています。

モイーズのことを想うたび、この名に相応しいセクションをと考えていました。若いスタッフと一緒にたつてつくっていくことが、今の私の夢でもあるのです。

# 五感で感じる「銀」の話

押田 良機



銀、あるいは銀を主成分とした銀合金は、鉄鋼材料のような構造用材料ではなく、チタン合金に代表される、ある特殊な働きをしてくれる機能材料でもなく、主に食器、装飾品、楽器などに使用される材料と一般には認識されています。

銀製のフルーツについては、「温かみがあつて深い音」がするとよく言われているようですが、何故そのような音になるのでしょうか？ 本来にそのような差を聞き比べられるのでしょうか？ 金製フルーツと銀製フルーツでは、「音量」と「鳴りの深さ」にも差異がある。えっ、そこまで分かりますか？と疑問はつきませんが、これに正確に答えるのは、金属学の専門家でもなかなか困難な問題です。こ

れらを純材料学だけで説明しきれない何かがあるはずなので、これらについて考えてみようと思います。

では、重さは別にして（というのも、1cm角の純金のサイコロは19.32g、純銀のそれは約半分の10.50gと大きく違うので、目隠しをして、金製フルーツと銀製フルーツを聞き比べてみたとき、この響きの差異が明確に分かるのでしょうか？ 「温かみがあつて深い音」とは、果たして聴覚だけの感覚認識に基づいた音の色なのでしょうか？ 著者には、どうも「五感」が統合的に作用しての感覚認識であると思えません。そこで今回はその五感で「銀」はどのように感じるものなのか考えてみることにします。

まず、「銀」と聞くと、フランス・レハールのワルツ「金と銀」、オリンピックの「金」「銀」「銅」メダル、「金閣寺」「銀閣寺」「極銀」など、なぜか「一歩引いて、光っている」金属ととらえられています。さらに、「銀」という字の右側「艮」は、あまり変わらないものという意味もあります。要するに錆びにくい金属でもありません。しかし、大気中のイオウと反応して硫化膜を作つて黒ずんでくることはご存じのことと思いますが、これは錆ではありませぬ。また、金属の構造的にはそう複雑ではなく、金に次いで延びやすい金属で、1gあれば1800mものワイヤーを作ることができると言われています。また、人類は紀元前3000年頃から銀を利用しており、純金属の価格を金と銀で比較すると、古代エジプト文明では、銀の方が金よりも約2.5倍高価で、金製品に銀をメッキすることもあつたらしく、中世のヨーロッパでも銀の方が高価だったが、いつからか逆転してしまい、現在は金の方が銀よりも高価で、金メダルは銀メダルに金メッキを施したものです。

## 視覚——銀と光

「なぜ、銀は銀色なのか？」人間の視覚細胞には、赤、青、黄に感じる三種類があり、その刺激の割合によつて正しく色を感じます。銀は、可視光線全域（赤外線、赤・・・紫、紫外線）

に対して90%以上（つまりほぼ全て）の反射率を示すので、入ってくる光は銀表面でほぼバランスよく全反射されて、白く（白銀）に見えるのです。奥ゆかしい高級感があるのは、この可視光線によるものかも知れません。

また、「色には感情がある」とも言われ、男性が好む色として銀を選んだ場合は、最高のパートナーとなる女性に「ロマンチックで信頼に値する人」を期待し、女性が銀を選んだ場合は、「騎士のような男性」を望んでいる、とも言われています。少し進んで調べてみると、マリア像や天使、仏像の背後や頭上に黄金の環や光背があるのも、天からの陽光とそれに代表される彼岸世界の象徴であり、一方、銀が月光に深いかかりを持つ事は、銀閣の向月台でも明瞭であります。つまり、金と黄色に光輝が加わつたもので、銀は灰色または薄青に光輝が添加されたものと見受けられる。銀は、やはり「一歩引いて光っている」のです。

## 触覚——銀の肌触り

フルーツや食器などの銀製品は、手に触れた瞬間、ヒンヤリと感じるはずですが、しかし、それをつかの間、すぐにヒンヤリした感じは消えている事に気がつくはず。銀は、あらゆる金属の中でも一早く熱を伝えてくれます。つまり熱伝導率が高いということです。金の3割増しです。

従つて、手に触れた瞬間に感じるヒンヤリはすぐに体温と馴染んでくれます。また、銀の熱容量（ある物質の温度を摂氏1度上げるのに必要な熱量）は、金の8割も高い値です。したがって、温度変化に対して比較的鈍いので、だんだん楽器が温まって音程が上がっていくということが起こり難いわけです。

## 嗅覚

金属の匂いとは何かというと、その金属のイオンの匂いです。あるいは、表面に形成された酸化物の匂いかも知れません。金属がそれほど簡単に水分に溶けることはないという意見があるかも知れませんが、金属アレルギーというのは、金属が汗に溶け込んで身体に吸収され、アレルギー反応を起こすものです。幸いにして銀にはありませんが、アレルギー反

応はごく微量の金属で起こるもので、実は「匂い」もごく微量の分子やイオンがあれば感受できます。日本のコインはアルミ製の一円玉を除くと全て銅を含む合金製です。手に汗をかいた状態でコインを触ると、たちまち銅の匂いが出てきます。これは汗との反応で銅イオンが出てきたためです。

ここで、銀イオンの功罪に関してですが、銀が古くから支配階級や富裕階級に食器材料として用いられてきた理由の一つは、硫酸化合物やヒ素化合物などの毒を混入された場合に、化学変化による変色でいち早く異変を察知できる性質からだという説があります。また、銀イオンはバクテリアなどに対して強い殺菌力を示すため、現在では広く抗菌剤として使用されています。例えば抗菌加工と表示されている製品の一部に銀化合物を使用した加工を施しているものもあります。

でも、ピッカピカのあなたのフルーツは何も匂わないはず。銀は、銀イオンが出るほど表面が不安定な金属ではないから。

## 味覚

このごろ、金、銀、銅のメダルをかじつてポーズをとるアスリートを多く見受けられます。いかなる意味なのか分かりませんが、まさかメダルの味を味わっているわけではないでしょう。唾液には驚くほど多種

類のケミカルが含まれており、しかも中性を保つ緩衝作用がありますが、それが加齢に従つて弱酸性へと移行します。これは、あらゆる金属には歓迎されない現象です。なぜなら錆びやすくなるからです。世に言う「メタル・テイスト」（なか、口の中が金属の味がする）というのは、この現象の結果です。金歯など異金属の上にステンレス製あるいはシルバーのスプーンがフォークを直接接触させていると、食器の方が腐食され金属味を呈します。ただし、銀イオンは、生命維持にとつて欠かせない元素（必須元素）ではないので、摂取しなかつたからといって身体になんら支障をきたすわけではありませぬ。ですから、あえてメダルをかじるなどして摂取する必要はないのです。

## 聴覚——銀と音

一般に、優れた音響材料は、軽くて曲がりにくい材料とされており、銀は金とともに良好な材料です。因みに、このカテゴリーで一番優れている材料は軽くて強いので航空機材に多く使用されているチタン合金です。従つて、工業用純チタンで製作し、仕上げを銀メッキしたフルートは、一度試す価値があるかも知れません。更に、材料の中を伝達する音速も速いほど音響効果が良好とされています。銀は、金の5割増しで速く、更に固有音響抵抗値（空気を単位速度で振動させるのに必

要な圧力）が高いほど良い音色を出すといわれています。

果たして、これら五感の要素がすべて影響して銀製フルーツの「温かみがあつて深い音」が聴こえてくるのでしょうか？

銀の存在は、「一歩引いて、光っている」に集約されるように、決して目立ちたがり屋ではないが、いったんその存在に気付くと気になる存在感があります。銀製フルートは、初心者には温かく迎えてその心を掴み、プロには吹き負けしめい毅然とした姿勢を崩さない、まさしく燻銀の熟年で分別のあるシルバー・シチズンではないでしょうか！

押田 良機（おしだ よしき）

早稲田大学理工学部金属工学科卒、米国シラキュース大学大学院修了。

シラキュース大学工学部教授、インディアナ大学歯学部名誉教授を経て、現在、サンフランシスコ大学歯学部教授。工学博士。

生体材料としてのチタン材に関する世界的権威で英著書多数出版。日本においても信頼される新しいタイプの歯科インプラント医の育成に力を注いでおり、東京等で数多くのセミナーを開催している。

学生時代よりチェロを奏し、また自ら弦楽器の作成にも力を注ぎ、弦楽四重奏用の一式（2本のヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ）を完成。特に、チェロは、故ヤノシュ・シュタルケルから賞賛を受ける。





総銀製ムラマツ・フルート

DS MODEL  
SR MODEL

シルバーを極めた  
温かさと美しさ

● 中村光延 製造部長に聞く

### スタンダードとしての総銀製

総銀製のDS/SRモデルについて、埼玉県所沢市の製作所でムラマツ・フルートの製造を管理する中村光延は語る。

「世界中のプロの方々のどんな要求にも十分応えられるモデルとして、オールマイティな性格を持っています」。

総銀製フルートは今も昔も、プロ・アマを問わず、多くのフルート奏者にとって、フルートの魅力を最大限に享受できるスタンダードなモデルと言えます。中村はこうも言う。

「総銀製モデルをしっかりと吹きこなして、その魅力を十分に味わっていただけたならば、その方は相当な腕前になっているはず。すると、音色をはじめ、フルートへの好みを、今後どういう方向に持っていきたいかを決めるとき、総銀製モデルは確かな基準になるはず。たとえば、もっとパワフルな音でダイレクトに音を伝えたい、あるいは、さらに軽やかに吹ける楽器がよいのは、といった要求は、総銀製モデルをよく知ることによって、はっきりしてくるのだと思います。つまり、このモデルはひとつのゴールであると同時に、通過点でもあるわけですね」。





ドローン・トーンホール トーンホールは管体から引き上げ、先端をカーリング加工する。

HANDMADE  
**DS** MODEL  
総銀製 A:442 Hz.

## 2種類のトーンホール

現在、総銀製モデルには、ドローン・トーンホールの「DS」と、ソルダード・トーンホールの「SR」の2つのモデルがある。

「ドローンは一本の管からトーンホールを引き上げてつくる一体成型です。そのため全体の重量を軽くでき、また異種の金属が入らないので響きの反応がよいという特徴があります。これに対してソルダードは、管本体にトーンホールの筒を溶接して作ります。トーンホールは管体よりも厚みのある銀を使用しますので、重量は増えますが、深みのある音色が際立ちます。最終仕上げはドローンの場合、トーンホールのフチ（パッドが接する部分）を外側にカーリングさせて丸くし、ある程度の厚みを出します。逆にソルダードは、フチの断面をカットして仕上げます。ドローンとソルダードでは、その製造法の違いからそれぞれに吹奏感・キータッチなどに個性が生まれますが、どちらが優れているということではなく、好みで選んでいただくわけです」。

ソルダード・トーンホール トーンホールは管体よりも厚みのある銀の筒を溶接（ハンダ付け）する。



HANDMADE  
**SR** MODEL  
総銀製 A:442 Hz.

## 管厚の違いと音色

総銀製モデルには、ライト管と、ヘビー管という2種類の管厚が用意されている。

「ライト管は、ヘビー管との比較のため、このように呼んでいますが、スタンダードな厚さを持ち、特別に薄いわけではありません。ヘビー管は、通常よりも厚いと考えてください。100分の数ミリの違いではありませんが、このわずかな違いで、吹き心地や音色が変わってきます。薄いほうがやや明るめの音色となります。また、SRモデルには、エクストラ・ライト管という、さらに薄い管もご用意しています。これはSRモデルの個性を生かしつつ、軽快さを求める方に適していると思います」。

## メッキについて

ムラマツ・フルートの総銀製モデルは、メッキを施していない。このこともムラマツ・フルートの特徴といってもよいだろう。その理由について中村に聞いてみた。

「メッキをしないということは、音色への影響はもちろん、溶接部分や細部の仕上がりに妥協していない結果、と考えていただければよいと思います。フルートは多くの部品から作られています。1つのキーが10個の部品から構成されている場合もあります。管体も含め大きさの異なるそれぞれの部品を、金属にダメージを与えない最適な温度で溶接し、全体があたかも一つの金属から出来上がっているかのように仕上げることを、理想としています。ですから、メッキによる『お化粧』は必要ないと考えています」。



「さて、それでは銀製の上に銀メッキをかけたらどうなるか。それがよい方向に変わるか悪い方向に変わるかは考え方にもよると思いますが、メッキは長年使用していると摩耗し、使っているうちに表面にムラが出ることもあります。そうした経年変化も視野に入れた長いスパンで考えると、メッキがないほうが素材の変化も平均化されますので、修理や復元がやりやすいといった利点もあります。加えて、地の素材の音色を生かすことも考え、銀無垢の素材には、研磨のみで仕上げる伝統的な工法を採用しているわけです（総銀製特殊プラチナメッキ仕上げのPTPモデルは除きます）」。

## 細部までこだわったハンドメイド

また、総銀製モデルに限ったことではないが、ムラマツ・フルートは細かな部品についても細心の注意が払われている。キーを支えて回転させる軸であるシャフト（芯金）、キーの動きを制御するバネ、パッドを止めているネジやワッシャーなど、細かな部品は数多い。

「外側からは見えない部分には、メカニズムとしての耐久力や、加工しやすさ、弾力性などを考えて、最適な素材を選んで採用しています。さらに、こうした細かい部分が積み重なって、全体の音色・響きに影響しますので、いろいろな側面を考慮しながら、部品の素材や形に細心の注意を払っています。こうしたことは、これまでの試行錯誤や実験などを重ねた製品作りの中で培われたものなのです。DSモデルとSRモデルは、銀という素材を極めた、温かさと美しさを持つフルートです。しかし、言葉だけで楽器の全てを表現することは容易ではありませんので、ぜひ一度お試しになってください」。

# 音楽史の扉 C.P.E.バッハ

このシリーズでは作曲家の生涯や時代背景、そして作品等について、読者の皆さまにお楽しみいただくコーナーです。今回は生誕300年を迎えたC.P.E.バッハについて、歴史の扉を開けてみたいと思います。



Carl Philipp Emanuel BACH (1714-1788)

桐朋学園芸術短期大学 特別招聘教授  
武蔵野音楽大学、広島エリザベト音楽大学 講師  
ムラマツ・フルート・リッスン・センター・マスタークラス 講師  
**白尾 隆**

## 美

食家であり愛煙家、妻と三人の子供達を愛し、多くの友人達と親しく交際し温かい市民生活を楽しんだ、当時ドイツ最大の作曲家であり鍵盤楽器奏者であったエマヌエル・バッハは1788年、ハンブルクでその74年の生涯を終えました。友人達は彼の業績を称えるとともに、いつも快活で愛想よく、理知的でユーモアに溢れたその人柄を偲びました。

カール・フリーリップ・エマヌエル・バッハは1714年、いわゆる父ゼバスティアンのワイマール時代、ゼバスティアンと最初の妻であるマリア・バルバラの次男として生を受けます。その後父の就任地の変更に伴い、ケーテン、ライプツィヒの少年期、青年期に、父ゼバスティアンを「唯一の師」として、鍵盤奏法と作曲を習得しました。1734年、20歳の時にライプツィヒ大学法学部からフランクフルト(オーデル)大学への転入にともない、親元を離れ独り立ちします。そして1738年、プロイセン皇太子の宮廷楽団員に就任します。



フリードリヒ 2世 (1712-1786)

これより彼の生涯は大きく二つの時代、30年間に及ぶベルリン時代と21年間に及ぶハンブルク時代に区分されます。1740年、プロイセン皇太子がフリードリヒ二世として国王に即位し、エマヌエルは第一チェンバリストに就任します。このフリードリヒ二世は存命中より国民から「大王」と呼ばれ慕われた、開明的な啓蒙君主でした。当時フランス、イギリスから広まり始めた啓蒙思想に深く傾倒するフリードリヒは、多くの文化人を宮廷に集わせ、ヴォルテール等の哲学者とも親交を結び、古い因習、迷信を遠ざけ、より合理的で理性的な、そして人間は生まれながらにして平等であるという事を踏まえ、

らにして平等であるという事を踏まえ、国事に携わります。それは例えばフランスのルイ王朝とは正反対の生き方であり、私利私欲で一族の栄華を押し進めるのではなく、国王の仕事で国民の生活を豊かにするためのものと捉え、自らを国に仕える公僕としたのです。この思想はルネサンスの人文主義の流れが加速し、教会と王侯貴族に支配されていた世界から主導権が市民階級に移りつつある中で生まれてきたものですが、本来王侯貴族側であるフリードリヒが、国民の立場で国事にあつたという事が斬新であり、画期的なことでした。そして我々フルート吹きにとって更に「画期的なこと、それはご存知のごとく彼が芸術を愛し音楽を愛し、フルートを熱烈に愛したことでしよう。エマヌエル・バッハのフルート曲の九割程はこのフリードリヒ大王の下でのベルリン時代に集中しています。もし大王が存在しなければこれらの作品は生まれていないことでしょう。更には父ゼバスティアン・バッハの「音楽の捧

げもの」、間接的にもBWV1035のホ長調ソナタを始め、その他多くの作曲家達のフルート作品が存在していないでしょう。どうでもよいことですが、三〇〇年後の東アジアの島国で、私がこの様な拙い文を書くこともなかったのです。このなんとも文化的な王様は、平和な時期には週に三回から五回も宮廷演奏会を開き、自らフルートを演奏するばかりか、一〇〇曲以上のソナタと数曲の協奏曲を作曲しました。大王をチェンバロで伴奏したのはエマヌエルです。しかし興味深いことに、フリードリヒはエマヌエルの作品をあまり好まなかったようです。大王が好んだのは彼のフルートの師であるクヴァンツの作風、優美なギヤラント・スタイルであり、言うなれば差し障りのない教養ある美しい曲であり、その点、エマヌエルは独創的であり革新的過ぎたのかも知れません。

◀サンスーシ宮殿の音楽室での音楽会。中央でフルートを吹くのがフリードリヒ大王、右端はクヴァンツ。チェンバロを弾いているのがC.P.E.バッハ。アドルフ・フォン・メンツェルが約100年後の1852年に想像で描いたもの。

- フルートと通奏低音のためのソナタ 11曲
- フルートと鍵盤楽器のためのソナタ 5曲(4曲はトリオ・ソナタからの編曲)
- トリオ・ソナタ (Fl.Vn.Bc.) 12曲
- トリオ・ソナタ (2Fl.Bc.) 1曲
- 二声と三声のための12の小品集
- デュエット 1曲
- 協奏曲 6曲

1767年にエマヌエルの名付け親でもあるゲオルグ・フリーリップ・テレマン(カール・フリーリップ・エマヌエルのフリーリップは、テレマンのフリーリップに因んでいます)が亡くなると、その後任として、終生、ハンザ自由都市ハンブルクの音楽監督を勤めます。この地でカントルとして市内の各大教会の音楽を取り仕切る等多忙な日々を過ごす傍ら、彼はまた自作品の出版を積極的に行う几帳面で有能な実務家としての一面を見せます。

エマヌエルは親しく知人、友人を自宅の食事に招くのを喜びとして、その際請われるままに即興演奏を披露しました。バーニー\*によれば、その演奏は「次第に生気を帯び、何かに取り憑かれた様になり、靈感を帯びた」ものであったそうです。エマヌエル本人も「音楽というものは第一に、聴く人の心の琴線に触れなくてはなりません。」と

自伝に語り、そのためには演奏家自身が心から深く感動する事が肝心で、それなくしては聴衆を感動させる事は出来ないとしています。多感主義最大の音楽家として有名なエマヌエルですが、それを本人がどの程度意識していたかはともかく、彼独特の世界は鮮明であり、極上のセンチメンタリズム、そして意外な和声展開、突然の間や強弱法を駆使しての感情の急激な変化が特徴的です。それは微笑んでいる人が突然怒り出したり、次の瞬間にはもう涙もろく悲しんでいるというような、喜怒哀楽の変化の魅力ある表出です。このハンブルク時代のフルート作品は、

- 二集目の二声と三声のための12の小品集
  - 晩年の通奏低音とのソナタ1曲(ハンブルガー・ソナタ)
- そして最後の年に作曲された3曲の四重奏曲です。

エマヌエル・バッハを巡る人々や作品の解説等、記事の続編を、ムラマツのホームページ「カール・フリーリップ・エマヌエル・バッハ特集」にて、今後、連載いたします。

\*チャールズ・バーニー(1726-1814)イギリスの音楽家。ヨーロッパ中を巡って様々な社会と音楽を見聞し、1771年と1773年に、各国の音楽事情を記した二冊の本を出版した。これらは大変重要な資料となっており、C.P.E.バッハに関する記述もある。

